

## 異世代間コミュニケーションと異文化間コミュニケーション

## 1.11.2006 Peter Ackermann

## 1) コミュニケーションの「枠」

従来、異文化間コミュニケーションへのアプローチは、大雑把に言えば、自分の文化と相手の文化の典型的表現や行動の分析と比較でした。しかし、はたして典型的な日本人、またはドイツ人などの表現や行動というものは、存在しているのでしょうか。もしあるとすれば、それを紹介し羅列することによって異文化間コミュニケーションは成功するのでしょうか。私の研究では、少し違う観点からコミュニケーションを考えようとしています。

私の出発点は、一つの文化において、コミュニケーションが展開できる道筋は非常にたくさんあるにもかかわらず、一定の「枠」からはみでることができない、という認識です。表現や身振りは、個人個人によって違うと分かっている、一旦ある決まった枠を超えると、コミュニケーションは人に不愉快な気持ちを与えたり、誤解を起こしたりします。そのため、異文化間コミュニケーションの場合、お互いのその「枠」 — つまり、おかしなルール、絶対に守らなければいけないルール — について理解する必要がある、と言えます。

コミュニケーションが展開できる「枠」を理解するためには、まず、人がコミュニケーション能力をいつ、どこで、どんなかたちで身につけたか、について知ることが重要であり、つまり、コミュニケーション能力の習得過程に焦点を合わせなければなりません。そこで、私が一番深い関心を持っているところは、社会人としてのアイデンティティーが成立する16歳から26歳の年齢で、さまざまな葛藤を通じてどのようにコミュニケーション能力を習得し、どんな形で自己主張と自己の立場の確保を学ぶのか、という点です。

16歳と26歳の間の年齢層を、「若い大人」(young adults)と定義します。一般に、この年齢の人を指して「青年」・「少年・少女」・「若者」などということばが使われていますが、身体的にはむしろ「おとな」であることを強調するために、やはり英語の名称「young adults」(「若い大人」)という概念の方が妥当と思います。ちなみに、日本では、すくなくとも18歳までの若い人に対して、「子ども」ということばも使われていることが多い、と指摘できます。法的には間違いではないかもしれませんが、適切ではないと私は考えています(西山2000:57を参照)。

まだ社会人とはいえない、つまりお金をかせいでおらず、経済的に自立していない若いお

となにとっては、社会人に対して自分の価値観や将来像を主張するのは大事なことです。この課題は精神的な負担が非常に大きいので、若いおとなは同年齢層とグループ（peer group）をつくり、お互いを心理的に支えていきます。その結果、さまざまな小文化（subcultures）が成立し、小文化内のコミュニケーションに特有の「枠」とルールができます。そのなかで、若いおとなのコミュニケーション能力は多様に発展し、コミュニケーション・パターンが定着してくるのが普通です。

まず、定着してくるコミュニケーション・パターンとして、同年齢層との連帯感を維持するパターンを挙げなければならないでしょう。しかし、少しずつ、同年齢層を越えたコミュニケーションとその規則や規制も固定した形をとっていきます。同年齢層を越えたコミュニケーションとしては、両親に対する自己主張、上の世代から受容した知識・価値観・感情などに対する独自の解釈、就職先で順応しながら、自己の立場を保つ方法、社会の管理に対する抵抗と順応などを挙げる事が出来ます。

ひとりの大人が、自分の周りの人に接する際の習慣は、先に述べたようなプロセスで定着してきたコミュニケーション・パターンの枠内でできあがり、喧嘩でさえ分析して見れば、それに特有の「枠」とルールがあることが分かります。このように人間は自分の年齢層を越えたコミュニケーションにおいて一定の「枠」を認識し、その中でルールを習得するのですから、当然、自分の文化を越えたコミュニケーションの場合にも、同じ「枠」を想定し、同じルールを適用しようとしていきます。しかし、異世代間のコミュニケーション・パターンは、異文化間のコミュニケーションにおいてどこまで通じるか、どんな誤解を招くかを十分認識する必要があります。また、若いおとなの年齢で異世代間のコミュニケーションで固定してきたアイデンティティは、異文化間のコミュニケーションで期待される言語行動によってどこまで肯定され、あるいは否定されるか、という問題に立ち向かう必要もあります。

## 2) 日本の資料で見られる若いおとなのコミュニケーション能力習得

若いおとなのコミュニケーション能力の習得過程について調べた際、参考した資料は、規範的な性格をもつものと体験談的なものとに区別できます。規範的なものには、たとえば指導要領、マナーの手引き、宗教的生き方の手引き、職場で期待されるコミュニケーション・パターンなどを紹介する資料があります。これらの資料は、ある程度普遍的な「日本文化」を設定することによって社会の安定性と信頼性を図っているものであると言えます。

日本の職場でのコミュニケーションや礼儀作法などの手引きには、ドイツのものと比較し

た場合、次のような特徴が見えます。

1) 日本の資料は、利益（利潤）を強調します。たとえば、会社というものは利益を追求する組織として定義されており、ドイツの手引きより、日本のものの方がコミュニケーションと行動の目的や狙いを明確にしています。

2) 日本の資料はコミュニケーションにあたっての、言葉遣い・リズム・順序・上下関係への合わせ方などを細かく正確に指示します。ドイツの資料の方は、会社の仕組みや技術に関しては詳しく説明してある反面、一人一人の人間がどのようにコミュニケーションすればいいのか、という面に関しては、かなり大雑把です。ドイツの資料では、コミュニケーション・パターンの設定は明確にされることが少なく、ただ「親切に、丁寧に」としか言っていません。

3) 日本の資料においては、身体に特別な注意がなされています。ドイツの資料では、日本と同じように、清潔でめざわりにならない服については強調していますが、人間の身振り・動き・動作のスピードなどについては、ふれていません。日本の資料に見受けられる人間のからだは、流れにのってそこでエネルギーを生成しながら行動し、よって人間は生命力のある、動いている一体のからだとして社会に貢献できる、という発想は、ドイツの資料にはまったく見られません（図1, 2, 3）。

このように、日本の若いおとなは、明確な言語表現や模範的な行動パターンを学ぶ機会が十分に与えられ、そのパターン（つまり、その「枠」）に、からだ全体をもって適応しさえすれば、上の世代を満足させることができるはずです。それでは、なぜドイツではそれほど明確なパターンが存在していないのでしょうか。この点について、のちに触れます。

さて、体験談的な資料に目を向けてみますと、ここに見られる日本の若いおとな像は、どちらかといいますと、暗いです。尾木直樹の「子どもの危機をどう見るか」、西山明の「少年サバイバル・ノート」、土井隆義の「親密圏の重さと内閉化する個性」など、若いおとなを社会病理の観点から論じている資料が極めて多いことは見逃せません。また、古き良き時代にひきくらべ、「人目に恥を感じる」ことを知らず、「社会に積極的に貢献したい心を持たない」若者のあり方を嘆く本も多いです。このような見方が大勢を占めるようでは、若いおとなは罪悪感ができやすいのではないかと考えられます。現実の変化の背景にあるのは、個々の若者の意思的な選択ではなく、むしろ環境の急激な変化と家族の孤立がその主な原因ではないかと思われれます。この点についても、後にふれます。

日本では、ドイツやフランスなどで見られるような、若いおとなの思春期の悩みや葛藤、またこの時期に自然に起こる親子喧嘩を扱う本は、一般読者向けの資料としては、少ないようです（図4, 5, 6, 7, 8）。ドイツやフランスなどで出版されている、このような本は、対

立した立場が生み出す権力争いや攻撃的態度をいかにコミュニケーションによって解決するか、という点に的を絞っているのが、その特徴といえるでしょう。ドイツの就職向けの手引きと同じように、『若いおとなをどう扱うか』という手引きも、コミュニケーション中心で問題に焦点を合わせています。その反面、模範的なパターンを提示する例は少なく、ここから、現代ドイツでは、コミュニケーションというのは決まり文句や固定した言い方とは違うものだ、という認識が一般的であるといえるでしょう。（ついでにいきますと、昔のドイツの教育では、決まり文句と固定した言い方が多く使われていたことは、注目に値します。）

### 3) 日本における対話

日本には「対話がない」と主張する研究者（たとえば伊藤友宣『家庭の中の対話』、中島義道『対話のない社会』）は、外国文化の理想を基準にそう言っているでしょう。彼らは「対話」を次のように定義しています —

- 1) 対話とは一つのパターンに従うものではなく、人間の内から自発的に湧き出す意欲である（伊藤1985：124）。標語や、訓示の定式や慣用句は対話とはいえない（中島1997：64）。
- 2) 対話とは、勝ち負けの要素も、一方的に説得する要素もなく、お互いの違いをより明確にしようとするコミュニケーションである。（伊藤1985：41）。
- 3) 対話とは、たがいに向き合って話すことが不可欠な条件であるために、従属性の強いコンテキストでは、対話は成立しない（伊藤1985：98）。
- 4) 対話とは、特定のテーマが設定してある討論でもなく（中島1997：100）、また、たがいを傷つけないように配慮する人間的触れ合いの一環でもない（中島1997：104）。
- 5) 対話とは、各個人が自分固有の実感・体験・信条・価値観に基づいておこなうもので、（中島1997：102）、普遍的な真理をめざす（中島1997：134）。そのために、対話は優しさの大合唱ではありえず、他者との対立や摩擦を避けようとしては、成立しえない（中島1997：161）。現在の若いおとなの集団に見られる過剰な優しさは、本当の対立点を顕在化する対話とは言えず、かえって無関心やいじめを促進する原因となっている（中島1997：17）。

日本の論者が、特に若いおとなの間で普及している「優しい」コミュニケーションを批判し、これに懸念を抱いていることは注目に値します（土井2004など）。また、本当の対話が成立するための条件は、日本では満たされていないと指摘する著者もいます。しかし私は、日本では「本当の対話」が欠如している、という議論に対しては、以下の二つの点を指摘する必要があると考えています。

1) 先に挙げたような、日本の論者のいう対話は、西洋文化の一部にしか存在しません。いわゆる「本当の対話」をコミュニケーションの理想と考えてきたのは、西洋文明の中でも、特に、宗教儀式や神秘性を否定するプロテスタントの文化圏、しかも、その一部にすぎない都会の知識階級だけです。カトリック側に関しては、イエズス会の伝統をくむ、特殊の論争様式もあります。今、述べた事実を念頭に置けば、西洋文化のコミュニケーション・パターンを日本のそれらと簡単に対比することは許されませんし、大きい文化圏のなかの小文化・宗教文化・地域文化などに注目する必要があります。

2) たしかにドイツの出版界には、若いおとなとの接し方をテーマとする文献が多々あり、異世代間の対話の重要性を強調しています。しかし、その強調の背後には、対話の欠如、家庭内暴力、人間関係の崩壊などといった現実もあることを忘れてはいけません。

以上の2点を考慮しますと、二つの文化を比較するにあたっては、まずそれぞれの多様性に注意を払う必要がある、と分かります。欧米文化、あるいは日本文化の本質だけを探し出そうとしては、その多様性を十分認識することが出来ません。

多様性だけではなく、人間のコミュニケーションと行為には、正当 (l e g i t i m a t e) であるものと、そうでないものがある、ということにも、注意しなければなりません。正当性を持つ「枠」のなかにとどまる限り、いろいろのコミュニケーション・パターンが許されますが、一旦その枠を越えれば非難を浴びることになります。また、ここでは見逃してはならないことは、「若いおとな」は、「枠」を越えたり、「枠」の限界を試したりすることを通して、まさにコミュニケーションの正当なパターンと、そうでないパターンを区別するようになる、ということです。しかも、この年齢で固定してくる正当性の認識を、社会人になってから変更するケースは、たいへんまれといえるでしょう。

日本における数々のコミュニケーション・パターンにも、正当なものと、そうでないものがあるのであれば、その区別をどんなかたちで、どこで、だれによって習うのでしょうか。たとえば「対話」を通して問題を解決しようとするのは、正当なパターンでしょうか、そうでなければ、だれによってその正当性が問われているのでしょうか。また、上の世代にとって正当でないパターンも、現在の若いおとなの集団の中では、どこまで正当化されていくのでしょうか。もしかすると、現在の日本では、若い世代がかなりダイナミックなかたちで新しいパターンの正当化を急速に進めているのではないのでしょうか。なぜ、このように考えるのか、以下にその理由を述べます。

4) 現代日本におけるコミュニケーション・パターンの伝承とその難しさ

1980年代以降の日本で、行動やコミュニケーションに対する管理が厳しくなってきたという事実には、疑う余地がありません。そういう厳しいコンテキストの中には、少なくとも公の場でのコミュニケーション・パターンが固定した枠を出すことは難しいでしょう。しかし、世代間の価値観の伝承という観点から考えますと、事情はずっと複雑だと思います。

上で述べたように、日本の若いおとなには、現代のドイツ人より、模範的な行動パターンや明確なコミュニケーションの仕方を学ぶ機会が多く与えられています。しかし、そのコミュニケーションが「人間の内から自発的に湧き出す意欲」に支えられたものであるかどうかは、別の問題です。私生活に関していうならば、特に親子関係、あるいは祖父母との関係においては、戦後日本の文化、特に企業戦士の黄金時代にあつては、世代間の価値観の伝承が極めて困難であったと言えるでしょう。

西山明も指摘していることですが、深い亀裂は、1975年前後に見られます。それまで若いおとなの生き方を規定していたのは、「追いつき追い越せ」という標語を掲げる、頑張れば報われるという成長神話（西山2000：105）でした。西山はこれを「外向き」の時代と名づけて、後の「内向け」の時代と区別しています。内向けの時代には、頑張っても報われないという面があるだけではなく、「家族の孤立化」が急激に進んでいくという傾向もあります。家族と国家の間に存在する中間集団であるコミュニティの解体がすすむと、家族の壁は厚くなります（西山2000：104）。孤立した、しかも父親がほとんど家にいない核家族にとって、異世代間コミュニケーションはストレスと喧嘩の場に成りかねません。このように緊張感が高まるなかで、異世代間の価値観の伝承は困難になり、引きこもりや離脱（例えば新宗教とかゲームなどへの離脱）の現象が深刻になっていきます。

今日では、ほとんど忘れ去られているようですが、1960年代を代表する「追いつき追い越せ」の世代にとっても、コミュニティばなれや地域ばなれの風潮のなか、自分より上の世代とのコミュニケーションや価値観の伝承は、すでに非常に困難になっていました。また、日本の高度成長は高スピードで進んだこともあり、家屋・子どもの遊び・道路や公の場所の急激な変容などもあいまって、日本ではコミュニケーションの場と人間の接し方が、ヨーロッパにおいてより、はるかに短期間で大きく様変わりをしたといえるでしょう。特に注意すべきことは、中央集権国家の経済界が徹底した人間づくりを促進したという事実です。その結果、世界に類をみない、はっきりした立身出世のパターンが成立しました。学歴というパイプを通じて職場のランクが決まり（西山2000：31）、教育の画一化と価値観・道徳の統制は日本文化の大きな特徴になりました。「合わせれば報われる」という常識は、「追いつき追い越せ」の世代のエネルギー源だったと言えるに違いありません。

ん。しかし、ここで指摘すべきことは、「追いつき追い越せ」の時代が終わって、「追いつき追い越せ」のための苦労が報われなくなり、親の世代のさまざまな犠牲が「若いおとな」にとって無意味のように見えてきたという点です。このため、1970年代の半ばごろから、世代間のコミュニケーションが一層難しくなりました。

さらに、1990年代になると、会社の倒産、リストラの嵐、グローバル化がもたらす不安や従来の「日本的価値観」の否定をとおして、これまでに培われた「努力・真面目・協調」という生き方が、非現実的になりました（西山2000：33）。こうして、若いおとなにとって、行動や情緒の形成を支えてくれる上の世代のモデルが少なくなり、コミュニケーション能力習得過程も不安定になったと言えるでしょう。

#### 5) 異文化間コミュニケーションの場

異文化間コミュニケーションの場は、かならず人間の出会う場であり、ただ抽象的な文化と文化の出会いではありません。ここで忘れてはならないのは、個々の人が駆使できるコミュニケーション・パターンの数には限りがあり、しかもそのパターンは必ずある特定の「枠」で身につけたものである、ということです。異文化間のコミュニケーションの場合、それぞれの話者がコミュニケーション・パターンを身に付けてきた「枠」が、どのようなものであったかを理解することが大切です。

個人と「枠」の関係は、三つのレベルに分けて考えることができます。一つは、個人と、その人に固有の生活史や心理構造との関係です。もう一つは、個人を囲む家族、地域、社会層、環境など、つまり、個人と社会的コンテキストとの関係です。このレベルは、個人がどのような生き方を学び、どのような葛藤や対立の解決法などを身につけてきたか、ということを経験するレベルです。個人と「枠」の関係を決定する三つ目のレベルは、文化と歴史の流れです。文化と歴史とは、言葉をかえれば、政治的・社会的事件と言ってもよいし、思想・宗教・価値観の展開と変遷と呼ぶこともできるでしょう。人間自身も、その人間を囲む社会的環境も、必ず一つの歴史的文化的流れのなかに位置していることは否定できません。具体的な例を挙げれば、西洋はともかく、日本では男の世界と女の世界の区別、あるいは上下関係がもたらす上の者と下の者の区別があるため、「平等の人間同士の対話」が成立しませんでした。ここで私が言いたいのは、平等の人間同士の対話は不可能だということではなく、歴史的文化的な流れのなかで、正当なコミュニケーション・パターンとして成立しなかった、ということです。

たとえ人それぞれの個性はあっても、人間の行動はいずれも、歴史的文化的コンテキストとその伝承や教育の仕組みによって継がれてきた「物語」(narrative)によって

形成されていることを見逃せません。コウすれば褒められる・尊敬される (reward)、アアすれば非難される・無視される (sanction)、という賞賛と非難、尊敬と無視のパターンは歴史の流れのなかで議論によって正当化され、物語によって伝承されます(註)。

ドイツとはまったく違う、日本のコミュニケーションを左右してきた「物語」の例として、陰陽の常識、仏教の知恵、そして近代日本国家体制、の三つを挙げることが出来ます。ほかにもありますが、この三つの重要な「物語・narrative」は、人々の正義感と感情生活などに決定的な影響を及ぼし、そこから生まれる価値観は、欧米にとって、日本のコミュニケーション・パターンを理解するための基準になれると言えます。逆に、日本人がドイツにおけるコミュニケーション・パターンを理解しようとするならば、同じように、その土地に受け継がれてきた社会的秩序と精神的安定を保障する「物語」と思想体系を知る必要があります。

陰陽の常識というのは、東洋医学にも見られる対極の均衡や調和と、気(エネルギー)の流れに基づく健康の維持法のこと、人間の生命力の基盤と考えられてきました。日本では、この生命力を保障する必要条件とされてきた陰陽の常識は、特定の政治や宗教的思想と関係なく機能し、すべて物事の相互関係のあり方に決定的な影響を与えてきました。こうして、この「気」と「調和」の生物学的な観念は、日本の人間関係のありかた、つまりコミュニケーションのありかたを理解するための鍵になっていると言えるでしょう。また、陰陽は、自然で生物学的な観念であるからこそ、ヨーロッパの哲学のように、基本的なコミュニケーション・パターンのよしあしを理屈で討論することは、極めて困難だといえます。

人間を含め、万物を生物学的な「モノ」として把握しようとする思想は、近代ヨーロッパの伝統とかなり性質を異にします。特に15-16世紀におけるヨーロッパの宗教改革以降に見られる、全能神と個人との間の親子のような関係は、ヨーロッパの個人を宇宙というシステムの枠外に位置付けました。このような観点から出発すれば、西洋文化の人間はなぜ生物学的な「モノ」とはみなされないか、また、人間の身体が、日本のように、駆使できる「モノ」とみなされないかが、分かります。

では、陰陽の常識が現在の日本社会のどのような分野に潜在しているか、一つ具体的な例を挙げて考えてみましょう。日本で、新入社員のために新しい環境である「会社」の仕組みを説明する資料を読みますと、必ず人間関係のあり方について述べられています。ドイツの資料では、社員の知識や技術的能力、そしてもちろん、社員の親切さの重要性についてかなり詳しく説明されています。しかし、それに対して、日本の資料では、会社で



仕事を始める人にとって「会社はいろいろな人がいるところだ」という認識がまず必要だ、と強調されています（内田1990：2-6）。日本の会社は、ただ知識や能力のある、親切な人が働いている場所ではなく、そこで性格や年齢や学歴やランキングや価値観などがぜんぜん違う人が一緒になって、お互いに協力しながら仕事を進める組織だ、と説明されています。それぞれの違う人間と立場を繋げることによって、つまり「関係」を作ることによって、はじめて生命力のある組織ができてくる、ということです。この思想は、明らかに陰陽五行説を汲んだもので、存在するものがすべて結びついており、お互いに相互関係を保たなければ気が流れない、つまり、生命力がないという思想です。日本の伝統には、西洋の歴史的文化的「物語」の一部をなす「平等」という理想がないが、その反面、陰陽の常識に根拠を持つ「皆の生命力を保証する原理」が生み出す正義感が強く、この原理が日本社会において西洋の「平等」と似通った機能を果たしてきた事実にも注意しなければなりません（図9,10）。

仏教の知恵も、生命力を維持する重要な要素です。日本の歴史を考えてみれば、生と死の意味、苦しみからの救出と解放、苦勞に対する報酬など、人間の感情を左右する一番基礎的なテーマを取り扱うのは、仏教です。仏教の、コミュニケーションへの影響も見逃すことができません。仏教的の価値観では、意見や立場の対立が生じたときには、人間の心のなかで問題を解決しなければならず、対象である現実の世界を変えることはできない、とされています。仏教の知恵を紹介する資料では、現実の世界は「厳しい現状」、「つらい現実」、「社会の残酷さ」、「この世の理不尽」などのように定義され、自分の幸せと安定を保つためには、心の中の強さと生き抜こうとする意志が必要だ、と言っています。勧められている具体的な行為は、たとえば自分を見つめること、自分自身を磨き上げること、反省することのように、すべては自分のなかでしかできない行為です。また、特に大事なことは、こだわりを捨てることです。もちろん、反省をもって問題を解決し、こだわりを捨てる知恵で人間関係を発展させようとする、コミュニケーションはそれなりの特徴を示すようになります。

ここで国際理解教育の資料のなかから、仏教的思想を反映した例を引用してみましょう（谷川1996：37）。コミュニケーション能力を高める体験的活動が、次のように説明されています。国際理解の出発点は自己理解である。そして、他者の考えと交流を持つ場を設定することによって相手を受け入れ、自分の見方、考え方を高めていこうとする力を育成する（谷川1996：38）。そのプロセスで、自己確立と自己変革ができる。言い換えれば、他者理解というのは、さまざまな技術を使って他者を構造的な分析で理解することではなく、他者理解は、自己確立と自己変革による「新たな自己（づくり）」だ、と言ってもよいでしょう。これは、正に仏教的な世界観です。自分の外側にある客観的な世界をありのままに認識しながら、自分の内側にある「心」をこそ変えてゆこう、という世界

観にほかなりません。

日本のコミュニケーションを左右してきた、三つ目の歴史的「物語」(N a r r a t i v e) は、近代の国家体制であり、日本でもヨーロッパと同じように、ほぼ絶対的権力を持つ教育制度と軍事体制とが結びつき、非常に大きな影響を及ぼしてきました。換言すれば、異文化間のコミュニケーション問題には、お互いに競争関係にありながらそれぞれに国民の忠義を求める、近代国家という体制に由来しているところが多い、と言えるかもしれません。1926年に出版された「日本道徳論」を参考にすれば(清原1926)、日本における個人は「分子」と定義されており、天皇に対する忠義の関係によって自分の命が位置づけられていたことが分かります。その忠義には理屈がなく、忠義というのはただ「我が国の道」だ、と日本道徳論は強調しています。したがって、日本のコミュニケーション・パターンの特徴として、「昔から議論を好まぬ国民性」を挙げています。

戦後日本のコミュニケーションのありかたを考慮する場合、陰陽の常識、仏教の知恵、近代日本国家体制、という三つの「物語」を十分認識しなければなりません。これら三つが、日本におけるコミュニケーションの正当なパターンに極めて強い影響を与えてきた事実を認識すれば、特に上の世代が下の世代の若いおとなに接する際、客観的な討論と対話の成立が比較的難しいことが分かります。ここで気をつけなければならないことは、上述した三つの「物語」は、日本のコミュニケーションを独占的に形成してきた、しかもいつまでも形成していく、とは決して言えない、という点ですが、このことを考慮した上で、先に述べた三つの物語を日本のコミュニケーションの「枠」を理解するための出発点とみなしてもよいのではないのでしょうか。

## 6) 結論

話者がコミュニケーションという行動をどのように認識しているのか、どんな観念にむすびつけるのか、ということをもっと深く理解できれば、ただ単に異文化間コミュニケーションにおいて相手文化の表層に表れる言葉遣いや身振りの違いだけでなく、その違いの根本にある世界観を垣間見ることができると思います。人の表現や身振りは、原則として、個人個人によって異なってはいるけれども、一定の「枠」を出てしまえば、コミュニケーションは億劫になったり、違和感を与えたりして、人と人との関係が結ばれません。

コミュニケーションの「枠」を把握するために、コミュニケーション能力の習得過程に焦点を合わせます。対象年齢は、社会人としてのアイデンティティーが成立する16歳から26歳までの若いおとなにしぼります。この年齢で学んだ、同世代間と異世代間とのコミュニケーションで習い覚えた自己主張と自己抑制のルールは、大人としての自分のアイデ

ンティティを確立させるからです。当然、自文化以外の文化の人とコミュニケーションする場合、まず、大人としての自分のアイデンティティを習得したプロセスと、そのときに身につけたコミュニケーション・パターンを生かそうとします。

日本の資料を、ドイツのそれと比較すると、正当なコミュニケーションの「枠」が異なっていることが分かります。他の人間あるいは組織との関係の形成のし方については、日本の資料の方が非常に詳しく説明しています。たとえば、人間とは目上か目下の位置、または内か外の位置にいるものだという点を強調し、それによる細かいコミュニケーション・パターンの違いを説明します。さらに、人間の身振りと動作は、ドイツの資料ではふれてありませんが、日本の資料においては、極めて重要な要素として扱われています。

昔は必ずしもそうではなかったのですが、現在のドイツでは、コミュニケーションは「対話」を意味していると考えている人が確かに多いようです。「対話」を理想化する日本の研究者は、人間の内から自発的に湧き出す意欲的な対話は日本にはないと主張しています。このような主張の是非はさておき、ここで確認しておかなければならないことは、日本とドイツの見方が異なっている、ということではないでしょうか。ドイツで出版されている『若いおとなにどう接するか』というような手引きを参考にしますと、異世代間のコミュニケーションにおいて、葛藤は当然なものと思われていますが、それに対して日本の資料では、問題が起きないように、という点に特別の注意がなされているようです。

戦後日本では、標語と決まり文句を別として、一つの世代が次の世代に特定の価値観や、それを表現するためのコミュニケーション・パターンを伝承することが困難だったと私は述べました。親からコミュニケーション能力を学んで、その能力を生かしながら自分のアイデンティティを構築することは、不可能に近い場合が多かったと言えるのではないのでしょうか。その原因として、孤立した核家族、そのなかでの母親のストレスと企業戦士としての父親の理想化、また、日本における変化のスピードと、それによる不安とあせり、さらに、住空間の著しい変化とひきこもりを可能とする個人部屋の実現、あるいは道路と公の場でのさまざまな危険、などが挙げられます。

現在、日本における異世代間のコミュニケーションに影響を与えるもう一つの要因は、「追いつき追い越せ」の時代にできた立身出世のパターンであり、特に1990年代以降に見られるグローバル化と会社のリストラの嵐の中では、上の世代がこれを押し付けようとしても、「努力・真面目・協調」という生き方は報いられないか、という気持ちを抱く若いおとなが多いようです。これが、異世代間のコミュニケーションを困難にしている事実であると指摘できます。

日本とドイツを比較しますと、二つの文化の流れのなかで、個人と社会の繋がりを形成してきた「物語,narrative」、つまり、世代から世代へと伝承されてきた生き方の常識とそれが生み出す正義感と安定感、というものに相違点が多い事実を無視できません。このような「物語」のうち、ここでとりあげたものは、陰陽の常識、仏教の知恵、そして近代日本国家体制、の三種類の「物語」です。

日本における異世代間のコミュニケーションの現状を考慮しますと、異文化間コミュニケーションは難題のように思われます。アジアのなかでさえ、日本の歴史の特徴と東洋的価値観の特殊の発展のため、コミュニケーションは簡単ではないと言えます。とりわけ、葛藤や対立の解決法をどこまで異世代間コミュニケーションを通して学習できるか、疑問です。もし、自分とは別の世代に属する人間との葛藤や対立を解決することができないならば、自分の文化の外側にある、別の文化の人との葛藤や対立を、どのように解決できるのかということについて、非常に真剣に考えなければなりません。

しかし、逆の見方も可能です。異世代間のコミュニケーションがさほどの比重を持たないということは、若いおとなにとってまったく新しいコミュニケーション・パターンに適応することを楽にしている、という面もあります。

(チャンスさえ与えれば、たとえば国際交流によって！)

たぶん、今の世の中では、異文化間コミュニケーションが一番できないのは、異世代間コミュニケーションが比重を持ちすぎている、外に対して閉ざされた世界の人であるかもしれません。

\*\*\*\*\*

註

Narrative ナラティブ

1.

- Narrative は近年、社会科学や人文科学で注目されており、いわゆる「Narrative Turn」なるものが認識され始めるようになりました。 ...

- Narrative approach は、... 主体抜きの「事実」がそもそも存在すること自体に、異議をとなえます。世界は、それを語る人間によって、構築されるものである、そう考えるのです。つまり、... 世界は「語られること」によって存在するといってもよいでしょう。「語られる世界」は、もはや超越論的な「世界」ではなく、複数あるうちの「ひとつの物語(story)」と言ってもいいです...

(NAKAHARA,Jun: Multi Media Development Room, Educational System Technology, Graduate School of Human Sciences, Osaka University: Private Research Note on 'Narrative', ナラティブに関する、どこまでも私的な研究ノート。NAKAHARA, Jun, All Rights Reserved 1996-  
<http://www.nakahara-lab.net/privatenarrative.html>  
(下線は P.A.)

2.

私たちは一生のうちに、様々な出来事(就職、結婚、病気など)を体験します。そして、ひとつの出来事は他の出来事と結びつき、一連の物語(ナラティブ)として語ることができるのです。

... ひとつの出来事を他の出来事と結びつけて、物語として語ると、その出来事を意味づけることができます。

... 人生もまた、いくつもの物語からなる一つの大きな物語です。そして、自分の人生の物語を語れば、やはり、自分の人生や自分自身を意味づけることができます。

<http://homepage1.nifty.com/shigeki-suwa/narrative/>  
(下線は P.A.)

3.

私たちは「客観的事実ではなく言葉をたよりに現実を認識し、自分の生きる世界を構成している」のです。そして、このような言葉がつなぎ合わされて「語り」が行われ「物語」が構成されるのです。「『物語』は現実を組織化し、混沌とした世界に意味の一貫性を与えてくれる」という前向きな働きをする面もありますが、他方、「すでにできあがった物語」は「事態を理解する際に参照され、引用され、わたしたちの現実理解を一定の方向へと導き、制約する」という「現実制約作用」があることに留意する必要があります。

【基本情報】野口 裕二 [2002] 『物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ』 シリーズ ケアをひらく (医学書院)

[http://www.venture.nict.go.jp/contents/index.php/venture/node\\_60/node\\_62/node\\_145/node\\_1932](http://www.venture.nict.go.jp/contents/index.php/venture/node_60/node_62/node_145/node_1932)

(下線は P.A.)

## 主要参考・引用文献

赤根祥道（あかね しょうどう）『自己修養のすすめ』東京（三笠書房）1989。

天児慧（あまこ さとし）『中国とどう付き合うか』東京（NHK）2003，2004。  
NHK Books 984。

伊藤友宣（いとう ともり）『家庭のなかの対話。話しあえない父親のために』東京（中央公論社）1985。

井上裕吉（いのうえ ひろきち）・堀内一男（ほりうち かずお）『中学校 国際理解教育の進め方』東京（教育出版）1994，1998。

内田政志（うちだ まさし）『会社のなかの人間関係』東京（生産性出版）1990，1997。フレッシュマン・シリーズ。

尾木直樹（おぎ なおき）『子どもの危機をどう見るか』東京（岩波書店）2000。

金井良子（かない よしこ）『おれがマナーの基本です』東京（中経出版）1997，2003。

鎌田慧（かまた さとし）『自立する家族』京都（淡交社）2001。

木場明志（きば あけし）監修『陰陽五行』京都（淡交社）1997、2000。

清原貞雄 『日本道徳論』東京（改造社）1926。

社会経済生産性本部（2000）『仕事のすすめ方』東京（生産性出版）2000。

谷川彰英（たにかわ あきひで）・大宰府 西小学校 『国際理解教育と国際交流。コミュニケーション能力を育てる』東京（国土社）1996、1998。

土井隆義（どい たかよし）『「個性」を煽られる子どもたち。親密圏の変容を考える』東京（岩波書店）2004。岩波ブックレット No. 633。

中島義道（なかじま よしみち）『「対話」のない社会。思いやりと優しさが圧殺するもの』

京都（PHP研究所）1997、2000。

西山明（にしやま あきら）『少年サバイバル・ノート。家族のなかで「生き抜く」ために』  
東京（集英社）2000。

日本経済新聞社編 『新入社員の基本』東京（日本経済新聞社）1998、2001。

馬淵哲（まぶち さとし）・何条恵（なんじょう めぐみ）『入りやすい店・売れる店。新  
版』東京（日本経済新聞社）1993、1996。

馬淵哲（まぶち さとし）・何条恵（なんじょう めぐみ）『続・入りやすい店・売れる店。  
新版』東京（日本経済新聞社）1997。

山岡寛人（やまおか ひろと）他 『「十七歳」に何が起きているのか。親と教師は何が  
できるか』東京（旬報社）2000。

山田光胤 他『図説東洋医学。基礎編』東京（学習研究社）1979、1987。

PHP 『家族の「こころ」、見えますか？親子・夫婦の上手なコミュニケーション』京  
都（PHP研究所）2005、PHP No. 683。

Clerget, Stéphane: *Adolescents - La crise nécessaire*. Paris (Marabout) 1999.

von Engelhardt, Michael: "Generation, Gedächtnis und Erzählen. Zur Bedeutung des  
lebensgeschichtlichen Erzählens im Generationenverhältnis." In: Eckart Liebau  
(Hrsg.): *Das Generationenverhältnis. Ueber das Zusammenleben in Familie und  
Gesellschaft*. Juventa (Weinheim und München) 1997, S. 53-76.

von Engelhardt, Michael: "Biographie und Narration. Zur Transkulturalität von Leben  
und Erzählen." In: Michael Göhlich, Hans-Walter Leonhard, Eckart Liebau, Jörg Zirfas  
(Hrsg.): *Transkulturalität und Pädagogik*. Juventa (Weinheim und München) 2006,  
S. 95-120.

Glöckner, Angelika: *Lieber Vater, liebe Mutter. Sich vom Schatten der Kindheit  
befreien*. Freiburg etc. (Herder) 2000, 2005.



Goddet, Édith Tartar: *Savoir communiquer avec les adolescents*. Paris (Retz) 1999, 2002, 2006.

Rogge, Jan-Uwe: *Pubertät. Loslassen und Haltgeben*. Reinbeck b. Hamburg (Rowohlt) 1998.

Schäffer, Burkhard: *Generationen - Medien - Bildung. Medienpraxiskulturen im Generationenvergleich*. Leske und Budrich (Opladen) 2003.

Schneider, Sylvia: *Hilfe - mein Kind ist in der Pubertät! Die wichtigsten Fragen und Antworten für Eltern*. Stuttgart (Urania) 2005.